

「これは、はア怪からん事を言ッしやる、私い権右衛門でございませど、畜生どは、はア聞捨てになりましねえ。」と無氣に腹を立て、酔漢に喰て掛らんとする、六三郎は無理無體に袂を引いて互の間を隔てる、

「是れ放さやツしやれ、彼の衆は甚だ怪からんちや、私い田舎漢に相違はねえが、親にも畜生と申された事はございませぬ、はい、彼の衆は何處の衆だか……」

「權右衛門さん、まア腹を大きく持なせよ、言葉咎めなんかしては東京の花見は到底も出来ません、彼様酔漢は是れから幾組出會ふか知れないから、狂ひ水に喰ひ酔た奴だと相手にしなさんな。」

「いや、聞捨てにはならんちや、鶴呂野さん聞いてくれさッしやい、私い云ふ事が悪いか……六三郎さんが東京の衆の肩を持って私い凹ますが悪い

か、裁判打て貰ひませうかい。」

「困るなア、對手が酔漢ですかならなア。」と六三郎は手古摺て居る、鶴呂野も口を挟みかねて黙つてゐると、又一組の瓢箪を肩にかけた書生連一步は高く一步は低く蹣跚としてよろめきながら來た。あゝ悪い群だたと、六三郎は避けさせやうとしたが間に合ない、

「君、田紳君、やりたまへよ、……いよー小こい、えッちやく／＼先生、一杯献上、……花輪盛が思ひ献し手に取て呉れたまへ。」と一人が盃を丸手に差附けると、又一人ひよろめきつゝ、瓢箪を片手に

「枇杷樽夫人、花輪の弟分桃栗三藏、いざお酌かね……ははは、と酒を汲がふとするに丸子は吃驚して眞赤になり、良人の後背の方へ除けた。六三郎はまた此の連中を隔て、

『へ、へ、皆様は好御機嫌で……野郎が一杯お合を仕度もので……』と呑んで掛る。

『よー、君……萬歳！お合よろしい、さア波々と受けたまへ。』

『まだ……』

『面白い、君イ一所に來たまへ、是れから公園を一周して吉原へ繰込むのだから……は、は、は、は……』

『御愉快ですわね。』と六三郎は椰檜で酒の只飲をするを、感心した顔付で見つゝ権右衛門は、

『六三郎さん、彼の書生さんを知つて居なさるのかね。』

『何、知るもんですか、彼してやれば先方は喜んで、此方は酒の一杯み得さ、まさか馬の小便を提げて歩きもしないから……』

『はア、成程な……東京の衆は勘定高ふごせいただきますぞ、錢を出さずに往來で知らぬ人の酒を飲み歩かツしやるは、是りやア豪い智恵者ぢや、フ、ム怒るは損ぢや、三文の損ぢやなア、若し鵜呂野さん……』と権右衛門は頻りに感心して居る。

後背の方でワアワツと云ふ動搖きが聞えるので、四人は立止つて振り返ると稽右所のお花見、年増の二三人を先登に下町の娘連十七八人、何れも花見簪に半染の揃ひの手拭を襟にかけ、其の跡から十人餘も七五三の初袷に伊達を競ひ、大森鬘を帽子に代るもあり、坊主鬘に張子の大瓢枯枝につけた俄喜撰もあり、例の酒樽ぶら下げて上機嫌。

権右衛門は物珍らしく茫然見てゐる前を通りすがり、

『叔父さん、一杯やらねえか……』と盃を出された。今のいま六三郎の

頓智に感心してゐた處であるから、おツと此處だなと思つて

『はア、呉れさツしやるかのう……』とおつゝ手を出すと熊や竹やのからツ八連である、

『不景氣な奴が居やがるせ……此處までおいで甘酒進上……』

『おーい、田舎者やーい、……』とお出でゝの嘲弄に權右衛門、首尾よく附焼刃の失錯に口あんぐり、

『私イ往きましねえぞ。』

二九

附鬚に田舎者まで浮れて居る

夕立や田を三めぐりの神ならばと其角に凹まされた三圍や、昔を忍ぶ竹屋の渡し、さては牛の御前、心中にボンと淺草寺の鐘が引合に出る

長命寺も見終つて、土手へあがると言問團子、いざこと問ん都鳥はと見まはせど、隅田川は短艇の競争に赤の青のと聲を喧し、フレーの聲援は川水に響きて勇しく、テケテンの馬鹿囃子に紅白の幕打た花見船、大傳馬に人を山盛の乗合やら、荷舟や筏が上り下りの中を、千住通ひの一錢蒸気がブツと波を蹴立て、往復して、土手も川も花見る人で賑かである。

やがて花の隧道にかゝると。

『はア、天が見えましねえ。』と例の天真爛漫を權右衛門は發揮する、鵜呂野も丸子も込合ふ人を避けつゝ仰向て、花の下蔭に浮世を忘れて居る。『さア召しませ、灘の諸白……』と四ツ割一本二本する酒を水呑で賣つてゐる。權右衛門さん一杯グウと遣つてポツとすると大元氣だ。

『諸君！髻をお召なさい、髻は男子の威厳です……あア召しませお馴染の髻屋でござい、最新流行の髻屋でござい……』と沈着た調子で、辨慶に種々の髻を吊し、自らは鼻の下にカイゼル髻、口の下に關羽髻の房々したのを附ける書生風の男が賣つてゐる。

見てゐる間に賣れるわく、權右衛門一杯機嫌である。

『私イチツ貰ひませうかい……こりやア何うして附けまするな……はいく解りましたぢや、斯うかな……』と鼻下に美髻を蓄へば、中々隅にたけぬ洒落者である。六三郎は元來の飄輕者だ、

『私一人髻のねえのも心細い、お仲間入させて貰ひませうかね……』と是れも買て鼻の障子に挟む。

『私の黨に皆様を引入れたが……丸さんは何うだい。』と鵜呂野は笑ひな

がら云ふ。馬鹿くしい女がと相手にならず、先に歩き出したので男三人もぶら〜行く。

茶店には割合に客は少いが、一組や二組づゝは酒を飲み陽氣に騒いでゐる店もある。その客を覗ひ打に法界節が徘徊する、大道藝人の幾群かが混雑を縫ふて腮稼ぎに邪魔をしてゐる。

權右衛門は遣り附ない附髻を鼻の障子へ挟んだので、鼻の中がムツ痒くて堪らないから、取つたり挟んだりして居るうち、今度は障子がピリ〜と痛みを感じて來た。六三郎が平氣でゐるのを見て羨ましい氣もする。

『何うでございます、痛くはありませぬえかな……私イビリ〜して來たで。』

『は、ア、餘り荷厄介にしなしたからだ……觸らずに置けば何うもあり
 ませんよ。』と云れて、また痛いのを我慢して挟みこみ、折々チクリ〜
 と刺すを顔擧めながら、大手振て歩くさまに女連はクス〜笑ひて行き
 過るが、男連の口悪はいよー見事〜田紳に田吾作髯と冷かされても、
 馴れては一々腹を立ても居られず笑つて通るから、六三郎は

『権右衛門さんは、悉皆東京者になりましたね、夫れでは赤坂でも……』
 『あゝ若し〜滅相なことを云て貰ひますまいぞ……』と頭に手を揚げ
 たが帽子があるので、手はその儘逆戻りした。

赤坂ときいてギクリと顔の色の變つたは鵜呂野であるが、幸ひ丸子に
 は何の氣も注なかつたやうで、小供の劔舞を遣るのを見てゐた。

『良人一寸と御覽なさい、あの小つべいのが……まア好く遣るぢやあり

ませんか。』と云つた。鵜呂野は占たと縮んだ翠丸が急に伸び、例の濟し
 た調子で、

『中々遣るね……』と答へて、権右衛門と顔を見合せた。

四人は黄塵を浴びながら花下を辿つて漸々の事で白髭の邊まで来た、
 六三郎は一の動議を持出した。

『皆様もさぞ草臥たでせうから、茶の一杯も吞で往きませうか……』
 『そりやア賛成よ、妾、先刻から便所が……』

『ぢやア、土手下にしませうよ。』と氣を利かして内便利のある處へ休ん
 だ。素より上り込む座敷などは無い、縁臺に腰を掛けて正宗に茹玉子、
 それに海苔巻と稻荷鮓、安直を目的に腹の蟲を撫でゝゐると、丸子が敬
 服したゐた小供の劔舞が廻つて来た、四人の前で鞭聲肅々と演り出した、

詩はお馴染のあるものだし、演るものは可愛らしいまだ碌々舌も回らぬ小供である。熱心家の令夫人は財布の口を固く締めた儘である、鵜呂野とて権右衛門とて中々のことである。其處になると職人の六三郎だ、切れ放れるだけは相應のことを遣る、

『おいよ……』と白銅一個投てやる、小供はまた一曲演するを、一同愛らしい心を奪られてゐると、縁臺がお留間になつて居るを、占たくとノツリく這ひ寄たは赤斑の大きな日本犬、茄玉子をバクリく喰ついて、海苔巻に口をつけた時、権右衛門が横を向たま、猪口を取らうとする、何だか手先が和らかなものが當つたので、ハテと向直ると大きな犬どの何の案内もなく二個まで鮓を啣へて逃げ去つた。

『ひやア、油断大敵でございませぬ、到頭犬奴に遣られましたぞ。』

『お客様何か……』

『犬奴に玉子と鮓を占められて了つたは、は、は、』

『夫れはお氣の毒さまで……彼の畜生は仕様がないのでございませぬよ、』

『へい、手前どもでも時折臺所で魚など奪られます。』

『なアに、此方の油断だ、仕方がねえ、彼ん畜生だつて腹が空たから泥坊するのだから……私等だつて喰なくなるは何をするか知れやしないせ、帳場を用心して居ねえとかツ拂ひを演るかも知れねえよ。』

『へ、御申戯もんで……』

三〇

鉢合對手は同じ自分なり

『歸りは砂塵を浴て土手を通るより、水神から一錢蒸汽で吾妻橋まで往』

きませう、川の中から土手の賑ひや花を見るのもまた洒落て居ますせ……』と六三郎が云へば、一同も賛成して白髯よりまた更に歩を進め、梅若塚まで行つて横に土手を下り奥の植半の前を右に切れ、千住通ひの川蒸汽に乗込んだ。客は一杯で坐るところも覺束ない程だつたが、花の頃である上陸者も又多いので、やつとの事で四人とも腰を掛けることが出来た。

『鵜呂野君、……鵜呂野君……』と隅の方から聲を掛けるものがある、丸子の耳には其の聲が一種の警鐘のやうに響いて、目を睜つて見まはす高男も權右衛門も亦六三郎も皆聲の發する方に視線を注ぐと、

『やア、笠田君だね……今日は何方へ……觀櫻ですか……』と高男がいつてゐる間に彼れは席を離れて、四人連の前に歩みを運んで來た。笠田

と六三郎とは初對面であるが、お互に名前は聞いてゐるから、直ぐに連れになる。

『僕は花見なんかちや無い、千住方面まで職務で出張したのだよ、是れでも勤める處は勤めて置かないと飯の喰揚げになるからね。』と笑つた。

『君、是れから社へ歸るのか……』と高男の聞くを、笠田は『なアに、電話を掛けて置けば、態々歸るにも及ばんよ。』

『お樂なお勤めですねえ、何うです、夫れでは淺草で御飯でも喰べて參らうちやありませんか、お交際なさいな。』と六三郎が云ふを、笠田は二ツ返事である。

五人連は吾妻橋の袂で上陸すると、傍道に外れず金田へ登樓る。例も繁昌の店であるが、時間がまだ少し早いので下足も左様澤山はない、ト

ン／＼と二階の階子段を揚がる、笠田や六三郎は心得てゐるが、見物のお昇りさん一名お棕鳥先生は御存知がないので、鷗呂野夫婦に續いて権右衛門さん、ピリ／＼の痛みを忍ぶ附髯の手前もある、酒氣もある、大手振で殿をした。

鷗呂野は二階へ揚ると斯う思ふた、見掛よりは廣い家である、廊下も大變長い、お、向ふからも客が來た、入口もまだ外にあるのだなと獨合點して、ズン／＼と進むとツシンと鼻の頭と胸を散々に打つた、丸子も突當つて膽を潰し、おやと云ふ叫びを發したので権右衛門は厄難を逃れ、

『ひやア、姿見を此様どころへ……東京のお茶屋は物騒ぢや……』

『成程、物騒なものですな、地方人でなくとも随分この姿見に突當つて一驚を喫するものがある。』と笠田は氣の毒がる。

『全くでさア、私の友達なんか諸に打突りあがつて、そりやア滑稽を演じましたせ。』と六三郎もいつて座敷へ通ると、寛りとした席もあつて、黄鶏肉で御酒！

『是れより直ぐ御歸館ですか……上野や向島の花も格別ですが、夜櫻は東京名所のオーソリチーとして數へられるもので、之れは一見の價値がある、令夫人御同行ならば鷗呂野君の如き石部堅吉金兜先生でも異議はありますまい、権右衛門君に至つては附髯の手前、夜櫻を等閑に附し去つては髯が泣きますよ……何うですか、奥様は……六三郎君といふ大通の御案内がある以上は鬼に鐵棒でな……』と笠田は酒氣に乗して舌甜づりをしながら云ふ。

『申戯ぢやねえせ、笠田さんは人が悪いやなア……』と六三郎は笑つて

ゐる。権右衛門は眞面目な顔をして

『はア、夜櫻ちうと何處へ参るのでございまするな……日暮れてからまだ彼の土手を歩くのでございますかい、京には夜櫻ツて篝火を焚き雪洞とやらを押ツ立て、豪う人が出をると話に聞いた事もございまするぢや東京にやア其様噂は聞きましねえでしたか……』

『有りますとも、花の中にアーク電氣などが點て、白晝を欺くやうで夜櫻は是非観ざる可からざるものです。』と笠田は笑ひを含みながら、咬るやうに言ひ出した。

『それでは参りませう……鵜呂野さんもお否ではございますまいな。』

『夜櫻てえのは吉原でせう……丸さん何うだい、見て來やうぢや無いか……』と高男は腮を撫でながら妻の同意を求める。吉原と云へば鬼門で

ある、危険の場所であるが、自分が腰巾着、いや監督して往く以上は良人をして自由行動は取らせないから大丈夫と、深い自信に満足してそれではと相談は一決し妥協は整ふた。

『吉原、はア吉原でございますか夜櫻は……お女郎屋のある吉原にも櫻が……』と権右衛門はまた奇問を發する。

『諸君が今日の觀櫻をして有終の美を爲さしむるには、吉原の夜櫻を疎外するは無風流の極ですよ、兎にも角にも江戸三百年來の名物の一つ、夜櫻を御覽にならんと云ふは嘘で……見物と云ば兎角表面のみ觀察するが、裏面或ひは側面の觀察をしなければ眞個でないです、歌舞の菩薩の根據地、愛の女神のガーデンを見なければ……』と笠田は調子に乗つて喋舌りたてる。

『夜櫻にはそろそろもう時間が好でせう、御飯にして出懸ませうかね……』と六三郎の切揚げに賛成して出たは、夕風の鱗雲も影を收め、星の輝きが次第に判然として来る頃であつた。

吉原の夜櫻はまだ蕾が堅いが、花に假托る遊客、素見はそろそろと大門の内へ呑みこまれてゐる。常には餘り足を容れない女連も多く、水道尻の方までごだくと人が込合て、張見世の遊女は目を皿のやうにして客を引寄せやうとする、川岸や隧道は燕の囀る如く呼び立てゐた。妓夫臺でも格子内の解語の花でも、

三三

蛤とはまぐりが合ふ汐干狩

今日の汐品川近し安房上總といふ誰れやらの句もある汐干狩、これも

花見と並び稱せられる東京人の見ぬがさなない遊びである。その盛況は大したもの、田舎の人々には一寸と想像のつかない程賑かだからと、例の笠田覺藏と大工の六三さんが催し主になつて、神田川から汐干船を一艘漕ぎ出さした。

連中は例の顔馴染の外に、笠田の細君きやん子も、六三郎のお内儀さんの、おのこも丸子のお友達馬淵鞍子も牛尾のろ子も、鵜呂野から誘つて同行したから、男は女より少いから多數決を探たら男子が勝を占める譯には往かないのである。

船は品川臺場沖海苔魚朶の間に着くと、最う二三艘の大傳馬は來てゐる、紅白の吹流しを立て花やかに装つて、三味線を弾く大鼓を敲く、笛を吹く、チャチャン、チャン、ドンドン、ピーヒャラピー、

おヒヤリコヒヤリコ、ストンドン〜、チャチャン、チャン〜チャ
 ン〜ラカチャンと陽氣に騒ぐもあれば、紅白の幕を張てブ〜ドンド
 ンの音楽入りで漕ぎ寄せるのもある、下方のお囃子入りで聲を自慢の唄
 を謡ふもの、馬鹿囃子のテケテン〜に踊り狂ふもの、當八拳で夢中
 になつてシャン〜、合子でドンなご、興する大連もある。また二人
 三人小舟を操り自分船頭で、エツシ〜と漕いで来るものもあつて、さ
 しも廣き海原も船と人も埋るかと思ふほど、澤山出て来る賑ひはまた
 別である。

『ひやア豪い人でございますな、此様に此處へ來さしやツしやつては向
 島も寂しふございませうのう。』と權右衛門の魂消るも無理はない。笠田
 は笑ひながら

『そこが東京の人口の多いのを證據立られるのです、今日は天氣は好し
 花は満開であるし、土手は歩き切れないほどの人出でせうよ、雷に向島
 ばかりでなく、上野でも飛鳥山でも乃至淺草の如きでも、凡そ花あると
 ころ、遊覽所は人で充満して居ます、何しろ二百萬の人が交替して出る
 のですからア……』と云ふ。

海苔巻やお握飯に煮染なども開かれる、酒もお爛が出来て微酔になる
 ころ、だん〜と海水は引いて來た、干潟も顯れて來るに、何の船から
 も〜海中に下りてジャブ〜と歩き、砂をほちつては蛤を拾ひ出し、
 あつた〜とキヤツ〜と騒ぐ女連も其處此處にあつて笑ひ聲が起る。
 都會の風に染みてゐる鞍子やのろ子は先立ちになつて、

『丸子さんもおのこさんも、男連の飲助に遠慮せずと貝を取らうぢやあ

りませんか、さア競争ですよ。」と船から下りるころは水は蹕の上へびたくくと来る位であつた。

権右衛門は支度した。足袋も脱いで入らうとするのを、六三郎は古足袋を出し、

『是れを履いてお入んなさい、貝殻で足の裏を切ることがありますから……』

『なアに、大丈夫でござえますよ、私イ等は國にゐるとな、野良へ出るには草鞋を履かない事が多うござえますちや、栗の毬でも踵で踏み割るほどに堅牢な足ぢやて、貝殻なんか……』と大氣焔で下りる。鵜呂野も降りた、笠田も入つたが、六三郎は船の中へ寝轉んで了つた。

鵜呂野と笠田とは何か頻に面白さうに話をして笑つてゐる、遠く是れ

を認めた丸子は何だか氣になつて堪らない。獨り女連の群を離れて遣つて来たを、笠田が目敏く横目に睨んで注意したから、二人の話は俄に眞面目になつて、おホン／＼の咳拂ひに瞞着されて了ふと、丸子の顔には時ならぬ電光がピカ／＼と閃めいた。

権右衛門は無邪氣である。矢鱈に砂の中を鑿くり返してゐるから、

『蛤のゐるところには、砂の上に穴があいてるから、其處を掘ると屹度貝があるんです……これ御覽なさい、穴があるでせう。』と笠田は掘つて見せるこ果して大蛤を一ツ拾ひ出した。

『はア、穴の下に居りますかな、蛤貝に穴は附きものでござえまするか……私イそれ知らんもんで、まだ一個も取れましねえちや……』と小さな穴のあいて居る處を掘ると、手に當るものがあつた。

『ありましたぞ、蛤貝が……』と取り出すと違つてゐる、
 『この蛤貝は豪うザラついて居りますぞ。』
 『權右衛門さん、そりやア蛤ではありません、汐吹といふ貝ですよ。』と
 笠田は云つてゐるうちに、鵜呂野も穴を當に堀ると探り當たは見事な貝
 である。

『權右衛門さん、貝を取るのには斯うして取るもので……は、は、』と
 と笑ふと

『貴下さんには、蛤貝は附きものでございませうかい、……大げえなら赤
 貝ちやございませうねえかな。』と云つて顔を見て大口あいてウハ、ハ、ハ、
 と大笑ひをした。笠田は、

『いよ……』と云つたが、傍に九子のゐるに心注ぎ急に手を口に當て

アハ、ハ、と遣つて瞞着したを、横向てゐた九子は佛様で頭に挿した留
 針の脱出してゐるも知らなかつた。

笠田は魚朶の邊を堀りあるき五個六個拾ひ取り、次の魚朶際へ移ると
 そこは干潟になつてゐる、大分堀返してあるから大漁もあるまいと思ひ
 つつ、魚朶の間を段々と潜りこんで行つた。魚朶の隙間からチラ／＼と
 真紅の色が見える、ハテ面妖なものがあるぞと、透して見るとまた白い
 ものもある、蜃氣樓だ大蛤貝の汐を吹き出すのだなと、人の悪い笠田は
 息を殺して罪なことを遣つてゐるが、魚朶に一面塵芥が引掛つてゐたの
 で、赤いもの白いものより見えないで、シャア／＼と勢ひよく音響が傳
 はつて來た。權右衛門がひよ／＼遣つて來たから、窃と手招きすると、
 無頓着に大きな野呂間聲を出して、

「何でございますな……」と叫ぶや、赤いものも白いものも急に無くなつて、ハイカラの若い女が飛上りさま眞赤な顔をして一目散に逃出した。「權右衛門さんは罪な人だよ。」
 「私より貴下さんの方が罪イ深いぢや、阿魔ツ子の小便するところなんか透見してござらツしやるは……は、は、は、は。」
 追々に汐がさして来る、今日の汐干狩も是れ迄と一同船にあがると、賣りに来る蛤を土産に拾つた顔して船は追手に帆を揚げて、大川口へ向ふのである。

三三三 幅されて男の縮む女づれ

鵜呂野と權右衛門は、今日はお供の役廻りだ、汐干狩に誘つたお禮心

か、丸子の朋友鞍子のろ子の兩夫人が主動で、笠田夫人もおのこさんも誘ひ三越見物である。

さなきだに男子を物の屑とも思はぬ新しがる夫人が三人四人、大工のお内儀さんでこそあれ、今時の女中々に口も手も八丁に伸びては、引込込に骨の折れるおのこさんも一所だ。汐干狩ですら優勢は夫人連にあつたが、今日は又特別の優勢を女に占められ、二人の男子は唯々諾々で只だ命これ従はねばならぬ、惨めな見物で、多数決と來たら一言半句も少數の意見は通らぬ、宛も議會で民黨とお味方黨との様なものである。
 電車は配合よく三越の前で止る、何とか展覽會が始まつてゐるので、大旗や小旗が飾り立てられて、見物の人かお客か知らぬが、ドヤ／＼人が入る、下足番は目を廻すやうに忙しがつてゐる、最う六七十人も來たら

満員だ、戸を引かねば成らぬと云つてゐる程の騒ぎであつた。

此處へ飛込んだのは女五人に男二人の一團である。ガラ／＼ガラ／＼下足を附けてゐるのを見た、權右衛門は鶴呂野の側へ寄つて、

『木戸錢は入りましねえかの……』

『左様だね、入りますまいよ、夫人連は度々来て居るでせうから……』

と云たものゝ實は不安であるが、呉服屋で木戸錢は取る筈はないけれど、下足料は何うだらうか、併し私は靴だから大丈夫だと濟してゐるは、此の男都會の空氣に觸れて腹黒になつたのであらう？

夫人連はズン／＼上るから、二人も附て上つたが一文も出さずに濟んだ。階下をさつさと見終つて二階に上ると目が眩むやうに、何千萬となき反物がある、何れを見ても美しい物ばかり、一つとして欲しくないも

のは無いと男でさへ思ふから、女では嘸ぞ咽喉から手が出るやうであらうと思へる。

『御覽なさい、随分立派なものばかりありますのねえ……丸子さん、旦那様に強請て此のお御帶を買つてお貰ひなさいよ、貴女には屹度似合ますよ』とのろ子が云ふと、丸子は只だ沈黙を守つてゐる、大工のお内儀さんや笠田夫人は歎息の吐息をつく。鞍子はまた斯ういつた。

『眞個に此處へ来る度に左様思ふわ、澤山お金を待て来て欲しいものが買れる身分になつたらと……ねえのろ子さん……』

『お互さまにねえ。』

『妾ども、切て一品でもと思ひますわ、それにつけても斯う買へ／＼と唆られるので、虚榮心の充ちた若い方々は、ツヒ不良心を起し萬引をす

る氣になるんでせうね。」

『笠田の奥様の仰やる通りですよ、眞個に同情する價がありまするわ。』
とのろ子が言へば、おのこさんも口を挟み、

『妾なんかは職人の女房で何うで買ないと諦めてますが、斯様にあるの
を見るとフラ〜として厭な氣持になりまする。』

『左様よ、眞個にそれに違ひなくツて……』と話つ、段々に見巡つて行
くと、帽子や肩掛や簪や櫛その外小間物もある、化粧品もある、傘から
履物、靴から文房具、小供や大供の玩具まで何一ツ無いと云ふものは
ないに、權右衛門は呆れかへり、

『是りやア、はア、おツ魂消ただよ……三越ちうところは昔の越後屋の
名前の變つた呉服屋だと思つて居ただに、萬屋の店でも此様には集りま

すまいに……』

『吃驚なすつて……阿父さん……三越のデパートメントストアと云つ
て、西洋にはこんな風の店があるのだツて、それを眞似て始めたのです
わ。』と娘のおのこが説明してくれた。

『斯して皆様とお心易くした紀念に寫眞を撮つて置きませうか……鵜呂
野さんも權右衛門さんもお交際下さいな……』と鞍子が發言すると、丸
子は笑ひながら、

『是非お願ひ申ますわ、なアに男連は多數決で壓迫すりやア好ツてよ。』

『あら、相變らず活潑ねえ……それぢやア多數決ですよ、鵜呂野さんも
權右衛門さんも……ホ、ホ、』とのろ子は笑ふと女連は喝采拍手をし
ないまで、勝誇つた笑聲をドツと擧げた。

夫人連の壓迫で幅の利かない寫眞を撮影しなければ成らぬことになつた。初めから今日はお供である、女どもの命令を奉じて盲従しなければならぬ、繼兒のやうに扱はれても小さく成つて居なければならぬとは、覺悟をして來ては居るもの、然りとては餘りに意氣地が無さ過ぎるが、今更何うすることも出来ない破滅に陥つてゐる、仕方のない鵜呂野と權右衛門は、牛に曳かれて寫眞室に入る。

いざ撮影となると如何に案山子のお供でも、女連の姿見に向つて白粉のチヨロ剃を修繕したり、衣紋を直したりするを畏まつて見せられるばかりで、男子が男子たる本分を維持する態度まで、棄捐して服従にのみ醒醒するも寫眞になつてから、甚だ醜い姿を遣すは終世の憾みであると、鵜呂野は子クタイの歪みを直し洋服の塵芥を拂ふ、權右衛門は頭の禿を

隠し帯を締直しなごして、寫眞は漸う濟んでまたくるくの堂々巡り、フトある處ると空中庭園と出いふのがある。

「こりやア魂消たよ、こんな處に庭がごせえまするぞ……昔のお大名様でもさツしからの事ぢや、さてく強い驕奢で……」と權右衛門の驚くも無理がない。

「貴所方も入らツしやいよ……」と鞍子のろ子が先登で一室に入る、室内には美しい令嬢方や紳士夫人が種々の御馳走を喰てゐらツしやる、又先錯場所かと鵜呂野は冷りと背に汗をした。

何時の間に注文したのか、お汁粉が七ツ卓子の上に出た。權右衛門は「はア、何でございますかな……」

「お汁粉ですよ……殿方には不向でせうが今日は……ホ、多数決ですか

らね……』と優勢な多数黨を笠に被ての専斷に、争ふことも出来ないで
只だ黙々として有り難く二人の男は東京のお汁粉を三越の食堂で味はふ
た。

三三三 出した跡意外謀逆の企てる

花は満開である、今日は日曜日である。この日をおいてはと待構へた
ものは多かつたが、生憎に朝から雨が降りだしてゐる。

丸子は正午すぎまで気分が悪いと云つて寝てゐるので、高男も一人で
飛び出す氣もなくぐづぐづに煙草ばかり吹かし、退屈さうに欠伸の共進
會を遣つて、日曜だから笠田でも遊びに来さうなものだに、何うしたか
知らんと心に思ひ、権右衛門も今日は何處へ出懸たか姿を見せないとい、

茫然して對手欲しさに降る雨を眺め、毎日／＼の出歩きに草臥てウトウ
ト睡る妻の顔を見てゐる。

「鷗呂野さん郵便！」と物品差入れ口から投げ込んで往つたのを、懶さ
うに起ち持て来ると速達郵便で馬淵鞍子から丸子へ宛て、来たのだ、

「丸さん、馬淵さんから速達郵便が来たよ……さア御覽……」

「何を云て来たの讀んで見て頂戴な。」と起きさうにもしない。高男は是非
がないと云ふさまで、

此の郵便届き次第直ぐお出懸被下度候、偶然にも同窓の友七八人集り、
俄に音樂會を催し候間、萬障お差練御泊がけの積にて私方まで御出
向願ひ候……

「は、ア、丸さんの學友が寄つて音樂會を遣るのだとさ、折角の催しだか

ら、大した事でなくば出懸たら何うだい……」

「左様ね、往つて見ませうか……良人は何うします。」

「私に來いと云ふこともないし、丸さんの同窓の友が寄ると書てあるに、私が往くは訝しいよ、確に不在をするから往つて來るが好い……」

「泊がけですッて……」

「何うせ遅くなるとの見込だらう……大丈夫だよ、心配はないさ。」と高男も勧めたので、丸子はその氣になつて急に支度をして出懸ける時、

「良人、能うございますかい、屹度ですね、浮氣でもすると酷いから……」

「執念深いねえ……」と笑つて丸子を送り出した。

今までは假令話はせず寢てゐても二人である。一人になつたと思ふと

急に寂しくなる、雨はますます強く降つて鬱陶しいので、あーくと出るものは欠伸ばかりである。

給仕が電話を取次で來た。笠田が來るといふので、今夜こそ羽を伸しての勝手が出来るが、権右衛門も家にゐて呉れ、ば好いが、歸つてからの話敵に同伴で往つて遣るにと待つて居た。

小一時間も窓から眺めたり時計の針を睨んだりして居ると、扉をトンと敲いて、

「鵜呂野君……居るか……」と云ふは正しく笠田覺藏である。

「君、直ぐ入れ、大いに待つて居つたぞ。」

「いや、失敬……君、一人か……細君は何うした。」

「馬淵鞍子夫人の催して同窓の音樂會を遣るツて招換状がついて出懸

た、今夜は泊り懸けた、大いに萬歳を三唱してくれ。」

『左様か……僕は今頃は君も居やしまいと想つたが電話で聞合すと居るてえから倉皇來たのさ……それとして何等の用意もないが……』

『其様ことは好が……權右衛門の奴も成るべくは同行して遣り度が……』

『それぢや、僕の乗つて來た俵を迎ひに遣つて見やう、居たら直ぐ來いッて云ば、彼奴ころくして飛んで來るよ、あはゝゝゝはゝゝゝ。』と笠田の車夫に手紙を持たせて迎ひに遣つた。

權右衛門も雨の爲めに閉籠められて、燻ぶつて居る處へ鵜呂野からの俵を持って迎ひを受け、直ぐにその俵で俱樂部へ乗り込んだ。

『やア來たね、今夜はまた一催しがあるので迎ひに上げたのだが差支へは無いかね。』と鵜呂野が云ふと、笠田はクス／＼と笑ひながら

『君にして名乗掛られた敵に後背を見る筈はないよ、無論同意だらう。

『はア、私イ何處へでも参りますぞ、田舎にゐては女房子がごせいにするに依て、豪う阿房をこくことも出來ましねえけど、東京では何、はア遠慮するものはごせいましねえぢや、はゝゝゝはゝゝゝ。』

『鵜呂野君はお茶瓶つきだが、君は一本立だから始末が好ね。』

『全くでございますぞ。』と以心傳心の間に默契も成立して了つて。

笠田は俵を歸した。三人が俱樂部を出たは日暮前である。幸ひに雨は小歇み傘を挿すともよいので、俵に乗るのも餘計な散財だと例の公園前まではお拾ひである。表面で繰込む幅が利かない、手軽に景氣をつけるは矢張淺草最寄だと、電車の厄介になつて例の雷門で降りたが、西洋御料理一品八錢の看板を見ると、こんな西洋料理はと鵜呂野が發議に、

笠田は萬更の物でも無いさ、物は試た喰つて見たまへで、暖簾を分て入り卓子につくと、

『正宗にトンカツ……』と注文する。

『はア、一品料理の店にも正道を搦きながら賣りに来る彼のトンカツ團子をごせいまするか、私イ團子で酒イ飲めましねえぞ。』と權右衛門式を出す、笠田は噴き出し、

『一品賣の店でも西洋料理だ、團子はないよ、トンカツといふのは豚即ち、トン豚のカツレツと云ふのさ、……全體こんな店で喰ふときは牛肉だと思つてると馬肉があるから、寧ろ豚に限るのさ……』と通な言をいつて、二三品で淡泊微酔になると最う矢でも鐵砲でも持て來いである。三人は、ぶらり〜と公園をぬけて十二階下へ出ると、

『旦那、三臺お安く参りませう……吉原まで……』

三四 夜櫻の餌に赤貝くはへ込み

雨あがりの泥濘みも夜櫻といふ餌につりこまれ、入る茗荷に出る生姜が一方口の大門口で、左々ど筋の入つた手丸提灯に制され、本性違はぬ生酔ども、争はずに吞吐されて居る賑ひは、餘所外にまたと見られぬ不夜城の光景である。

三臺の俵は衣紋坂に着た、だら〜降りの坂の真中に臨時の制札、車馬入る可からずの文字は夜目に讀みかねても、一時間交替の立番巡査が役目氣の毒に見え、人の心は日比谷の原に殿めしい洋刀の權威、怖な吃驚で横目にチロリと見るのとは大分感じ方が和ぎ、柔順に降りて五十

間道を急ぐ案内者は笠田覺藏、之れに續くは鵜呂野高男と權右衛門である。

不解語の花には既に見參して珍しくも無いが、解語花にはまだ出會したことのない二人は、先づお定りの見るは放樂、見らるゝは因果の掟を守つて、遊廓を一巡まはつた時、

『君、何うするか、今宵の先決問題は我々が登樓すべき階級の如何であるが……大中見世ならばお茶屋より送らるゝが世話なしで、敢て手腕を要するに及ばんけれど、若し小見世で愉快を取らんとならば、大いに方針の執り方で經濟問題に關係を來すからねえ。』と笠田はその登樓すべき場所を大難でも中見世でも又小見世でもと云つて、鵜呂野の意見を聞いたのである。

『左様だね……僕には其の邊の處は不案内だから、萬事を君に委任するよ、只だ窮屈な遊びより面白く愉快を盡したいね、權右衛門君にしても同感だらうと思ふが……』

『私イはア、馬鹿にされましねえ處なら宜うごせしまするぢや。』

『それぢやア、小見世遊びが面白い……小見世と云ても一から六まであるのさ、川岸のチョン／＼格子三人か四人の醜女のゐる處も、堂々たる三階四階の大夏高樓で幾十人の美人がゐる處もあるからね、要するに大見世は看板が入ると云つて引手茶屋から、箱提灯をさげ客の寢衣と白丁を持って送り込める妓樓で、小見世は茶屋受をしないのだが、其の小見世と稱するものゝ中にも中見世を凌ぐ立派なのがあるよ……だから其の中で錚々たる家へ揚ると決定して、異議はあるまいね。』

『異議はないとも……』

是れにて方針は決つた。笠田は再び京一の方へ足を向る、近頃は名聲噴々たる程ではないが、廓内の老舗で田舎者にも多少知られてゐる河内屋に白羽の矢を立てた。

雨雲が低く覆つて電氣や瓦斯の光に空焼がして、廓内の道は幾千の人に捏まはされてお汁粉のやうに泥んこであるを、河内屋の前に足を止めると、流石花の頃で、然も書入の日曜日である、張見世も宵ながら半以上は引けて居るが、飾り立て並ぶ女のうちには濫皮の剣たのもある、上手の二三枚は假令盲闘を引たとて、満更捨たもので無いと見當をつけた。妓夫臺からは頻りに

『入らッし……入らッし……當節柄決して御散財は掛ませんから……へ

へへへへ。』と氣味の悪い笑ひを浴せて、身體を半分も乗り出して招いて居る。

笠田は二人に目配をして、ツ、と入るとお揚んなさるよ、入らッしやいと云ふ訝々した聲が掛る、奥からも入らッしやいと浴せる、其の聲には何となく張りがあつて、威勢があつて、氣も引立つやうである。廣い玄關を昇ると幾個も並べてあるスリッパを引掛ける、直ぐ引附座敷へ案内される、眞鍮のテラ、光つた獅嚙火鉢に改良炭團のいかつたのを出した、座敷も新しく裝飾も綺麗である。

頭の禿た若衆が揉手をしてお敵娼は、へいお初會様で、別にお見立はなど念を押して引下る、遣手婆さんがお世辭を振蒔き、凄いやうな金齒を出して齒痕もあらはにカラ笑ひをする。

ボタン〜と重草履の音がすると、猪熊の大兵庫や島田に結た若いところ座敷へ来た。色彩陸離として羞明く歌舞の菩薩の尊稱も無理でないど、蕭洒たる藝妓姿にはピンとした響きを與へなかつた二人も此の濃厚した錦繪で目馴染の姿には、窃かに胸を跳らせ濟し屋の鵜呂野も微笑む、天真爛漫を主義とする権右衛門は、大きな口をあいて見惚れ、

「やア、ござらツしやつたな……美しいもんぢや……」と云ふを、笠田に窃と袖引かれて、目ばかりきよろ〜させ畏まつて座つた。新造が附て座敷へ入ると直ぐ片膝立て後向に控ると、遣手婆さんも新造も若衆も平蜘蛛のやうに平伏する。花魁はツ、と立て見向もせず、又草履引つかけてバタリ〜と行つて了つた。鵜呂野も権右衛門も呆氣に取られて見てゐたが、お座敷へ新造が案内したは入口が三疊奥が八疊の名代部屋

である。そして肝腎の菩薩どの更に來降しさうもないので権右衛門は不平で不平で堪らない、

「笠田さん……私イ面白くありましねえぞ。」

「何うして……」

「貴下さんは平氣で居さツしやるが、全體此家の阿魔ツ子は客を阿房にして居りますぞ、見さツしやい、來ると突然客に尻を向けくさツて行つて了ひ居つたぢや、彼れは何と云ふ不作法ぢや……」

「は、ア、権右衛門君、君はまだ遊廓の憲法を知らんから、左様思ふも無理はないがね、彼れは引附といつて客に花魁を紹介する式だよ、即ちお目見得の式で、古來からの習慣だから仕方がないさ、強ち此家ばかりで演るのでない、廓内何れの家でも皆引附はあゝするのだ……」と説明

され不機嫌ながら廓内の憲法とあつては仕様がないと諦め、不審に思つてゐた鵜呂野も首肯いてゐたが、權右衛門は再び

『はア、不作法な式でございますな……成程な、女郎衆は尻で客を取らッしやるに依て、それで後背を向き尻工合を見せさッしやるのか……それならそれと彼様芝居のお姫様の着るやうな着物で隠すことはねえぢや、何う考へても私イ解りましねえぞ。』と不愉快さうな顔をして居る。笠田はクス／＼笑ふ、鵜呂野は只だポーとひよろ高い丈を反身になつて居た。

三五

見立替前の女が威張出し

チャブ臺が出る、一滴の浸物で酒が始る、花魁も来て盃の献酬で敵娼も極つた。やがてお詠へど運んだのは大な皿の中に、五六寸の六角魚を

背開きにして焼たのが二尾と昆布佃煮がポツチリ着いて居る。鵜呂野も權右衛門も皿ばかり大きくて中の少いのに驚いて見てゐるのを、笠田は笑ひながら、

『何うだ、吉原の臺の物には驚くだらう、是れで大臺と云て五十錢ふんだくるのだよ、それで元價は十六錢さ……』

『貴客は口が悪いのね、其様ことを云ふものぢやありませんよ、一景氣でも付けて下さいな……』と新造は苦い顔をしてゐる。

『よし来た、内にゐるか……』

『はア居ますとも、呼で頂戴……好ですね、誰れを……』

『誰れも彼れも知るものか、其方でよろしくお願ひ申します。』と云ふと間もなく二人の内藝妓が現れる、其の一人は笠田の顔を見るより、

「おや、暫くですことねえ、何處を浮氣して居らッしやるの……箒さん……」と眞向正面から一本ボンと打込れ、笠田はさア失錯たなど腹の中
で後悔してゐる。

「君、此家は馴染のかい……」と鵜呂野は聞くを笠田は頭を振て目で知
らせつゝ、

「なアに、初會さ……」

「お初會もお初會も眞個のお初會ですわねえ。」と藝妓に皮肉られ少凹み
でゐるを、聞耳立てた新造は

「ちやん吉さん、此の方はお馴染なの……」

「はア、……」

「何方のお客様……」

「おや、老けて居らッしやるの……紫花魁のお座敷でお目に掛つた方よ。」
「貴客……眞個に性悪ねえ。」と睨み附た。一人の花魁はツゝと起て行つ
た儘再び姿を見せない。

遣手婆さんはブツ／＼と言ながら出て來ると笠田を捕へ。

「貴客は眞個に酷いよ、お馴染のあるのにお初會なんツて……花魁が可
哀さうぢやありませんかね。」

「僕は其様つもりぢやなかつた……」

「いゝえ、左様は逃させませんよ、今に紫花魁が入らつしやるから酷い
目に逢して上げますわ、ホ、ホ、ホ、ホ、。」と氣味の悪い笑ひを泛べて睨
んだ、笠田は其様ことには馴れて居る摺ッ枯しである、

「へん、面倒臭けりやア見立替をする分のことさ、吉原は廣し花魁は多

した……此處ばかりが貸座敷ぢやア無いから……』と強硬の態度で空嘯ぶく、藝妓のちやん吉は放心喋舌た事から面倒に成りさうなので、周旋盡力最も努め調停せんとして居る。

鵜呂野や權右衛門は質に取られた狸の如く譯が解らず、マジ／＼して居るを笠田は氣の毒に思ひ、

『御兩君に對して不愉快を與へては、折角の案内も水泡に屬するから……何處か外へ往つて遊ばうぢやないか……』

『はア、何處までも参りますぢや、全體此家の衆は私イも氣イ入りましねえぞ。』と權右衛門は引附で女に尻を向けられた不快さが、何うも腹の底にコビたれ附てゐる。花魁が來たかと思ふと直ぐ何處へか往つて、酒の酌一ツせぬ勿體振に興を殺さ不平を訴へ出した。宵の口から揚つた客

を歸すは店の延喜にも掛ること、藝妓と新造で寄て集つて權右衛門を祭りこみ、濟し込でゐる鵜呂野を持ち上げる、中ッ腹でゐる笠田を宥め賺し貴客の御無理は御道理で撫でつけられ、到頭丸めこまれて座敷は陽氣になり、笑ひ聲がドツと起つてだん／＼面白くなつてきた。

權右衛門の御機嫌も斜ならず、天真爛漫式はチラ／＼發揮して笑ひの種を蒔き、鵜呂野は濟し屋だけに、寡言だけにチャホヤされるも、お客の懷中を見るに敏い老功の遣手の如きは、今夜の金の蔓はこのハイカラ先生と見て取たから、此の玉さへ逃さずば大丈夫と、取巻の笠田などは眼中に無いのである。

一騒ぎして了つたは、宵にごた／＼などもあつたので、十二時ごろになつた。彌々三人三所に分れ納まる事になつて、夫れ／＼の一夜妻が侍

るのであるが、笠田は無理を通し切れないで、重婚の重ね妻ともいふべき新規の花魁には揚代を附けさせられ、去年の秋二度ばかり来た事の女に逆戻りした上、總祝儀といふお灸を据ゑられた。

大引といふ二時も過ぎて、何處の座敷も寂寞して了つた。廊下をバタン／＼の草履の音は耳につき、カチ／＼カチ／＼の時の木も冴て来たが、笠田は寢轉しである、宵にチラリの三日月様である。睡らうとしても眠られない、便所へ行つた序に極る廊下蔭、鵜呂野の部屋には重ね草履が脱であるから、彼奴納まり返つてると、権右衛門の部屋へ来ると大きな欠伸の聲が聞える。

『何うだね、一人かい……』

『是れは来さあしやりませ……私イはア獨りで……阿魔ツ子ア助と』

やらに行くと出をツた儘ぢや……貴下もかな……』

『あは、は、は、僕は覺悟の前だよ、宵の一件で悉皆復讐をされたのさ……』

『はア阿魔ツ子は来ましねえかな。』

『三日月様と来てるので……心細い譯さ、同病相憐れむよ、は、は、は。』

『三日月様ちうは、何の事でございまするぞ。』

『宵にチラリと見たばかりさ……』と云てゐるとバタン／＼と草履の音、障子がスーと開て女が来たので、笠田は倉皇て飛び出すと夜風が酔覺めの肌に泌みこみ、

『ハクシヨン……畜生奴！』

三六

頰落す味は此處なり魚川岸

二人は何うなり斯うなり納まつたが、納まらぬは笠田である、夜明まで不寝番に來たムシヤクシヤで馬鹿らしくツて、寛り寝てゐることは出來ないから、早く起きて権右衛門を襲ひ、また鵜呂野をも脅かして大門を出で、土手に掛ると

『昨夜は大失錯で御兩君に大迷惑を掛けたね、僕は知れまいと思つてたのが、彼の藝妓に素破抜かれ、イヤハヤ豪いお灸をすゑられた……其の代り今朝は不思議なところへ案内するよ。』

『不思議なところと云て何處だい、まだ朝飯も喰ないのに……』と鵜呂野は稍不安の言葉を洩らした、権右衛門もまだ目が覺ないか眼をこすり

く欠伸を續けさまにして、

『はア、是れから直ぐ何處かへ行かつしやるかの……私イ朝飯を喰んけりやア何うも腹アのう減て困るぢやが……』

『いや、豫期されるほど面白くもないし、また綺麗といふ譯ぢやないがね、東京の繁昌を想像される魚市場を見せやうと思ふのだよ、日本橋の魚川岸と云て朝市の景氣は宛然戦争のやうだ、賣つてるのか買つてるのか喧嘩をして居るのか解らない程でね、まごつくしたら張り飛される勢ひのいゝものだよ、處で地方から上京する人で此の景況を見た人は恐らくありますまい、東京で江戸ツ子の純粹が残つて居ると云れてる、魚川岸の兄哥連の活潑はキビくしてゐますせ、彼れでこそ魚もビチく生てるやうに思はれますよ。』

『夫れでは、ちよつくら朝飯喰てなア……』と權右衛門は鵜呂野に相談する。

『飯、その飯です……それを魚川岸で喰ふのです、是れが又市中で喰ふことの出来ない美味物が喰れるのです、景況を見てその美味肴で飯を喰て來やうといふのが目的なので……東京の人でも餘程の通人でないと喰たものはありませんまい、何しろ朝市の立てる間で正午前になると、最う店を閉めると云つても好のだから……』

『東京の人は朝飯を態々喰に出懸なさるのかねえ……』と鵜呂野は腑に落ちないやうな聞方をする。笠田はますます得意である。

『處が其の料理屋だ、……料理屋と云ても市中にある繩暖簾と同じやうで、至つて雑風景だがね、そこへ喰に寄る人は東京のお茶屋の亭主など

で、美味物に喰飽きた贅澤者が往くのだから、お價値も高いが美味ことは天下無類さ……』と喋々延べ立てに二人も其の氣になり、淺草まで俤それから電車で日本橋の川岸へと來た。

魚市場の混雑は大變である。成程戦争のやうだ、彼方でも此方でも大喧嘩が始つて居るやうである。

『やい、こん畜生、買あがらねえいか、やい、泥坊、何うしあがるんだ……』

『篋亂めへ……其様腐つた魚が賣物になるか唐變木奴！』

『野郎、ドテツ腹蹴破るぞ、面ア洗つて出直しあがれ……あは、……』といふ聲が聞える、是れが賣買の掛引き常套語である。鵜呂野は呆れて突立てゐる、權右衛門は吃驚して例の天真爛漫式も出ないで、只だきよ

ろく／＼と半恐れを抱いて、翠丸が上つたり下つたりして居る。

盲縞の鯉口に盤臺擔いだ勇みな男、混雜の中を右に左に操つて來たが、盤臺をツシン鵜呂野の足に打付るや、

「やい、盲！ドウ盲……頓痴氣野郎……田吾作のまご／＼仕あがる處ぢやねえや、こん畜生……半鐘泥坊、さつさと退きあがれ……」と口から出任せの啖呵に、またも荒膽を挫がれ、後退さりすると大鮪を舂で擔ぎ來る輕子と衝突すると、一層烈しい毒づき方に這々の体で漸う笠田に助けられて、辨松の暖簾を潜つた。

家は狭い、腰を掛ける處もなく一杯の客である。此様ごだ／＼した繩暖簾の辨當屋であるから、價が幾干高いと云ても高が知れてゐると、辨當を喰つてゐる客のあるを見た鵜呂野は手前勘定で

「一番高い辨當……」と云かけるを笠田は憫て、袖を引き止め、

「そんな事を言たら豪いことになるぞ……一番高い辨當といふと一人前五六圓も取られるから、放心した事を言ては大變だよ、僕に任せて置きたまへ……」

「えッ、一本の辨當が五六圓もするのかい……其奴は大變のことだ……」と鵜呂野は舌を巻く、權右衛門は低聲になつて、

「はア、其様辨當でも米の飯が入つて居りまするかな、怖かないところだ……」

「さうですよ、君、大抵の者が聞くと實地を知らんものは嘘だといふがね、此の市場で有名な鮪屋、家臺店の摘み喰だよ……握鮪一個、たつた一個だよ、それで君、五十錢もふん奪られるのがあるんだもの堪らない

さ、海老のね、ほらあの赤い伊勢海老の鮓ね、あれが廿五銭さ……」
 『そんな物を喰ッしやる人があらッしやるかなア……宛然金を喰ッしやるのぢや……』

『並の鮓でも萬事はこれだから、三ツ四ツ立食を遣るに先づ五十銭ないと手が出せないのだから驚くね。』と説明されて、いよゝゝ口も手も出なくなつた。

飯は井飯である。肴は小鮓の刺身に鯛の鹽焼、骨切鯉の汲物である。笠田が通を利かして昨夜の失敗を、この朝飯で帳消にする智恵のほど見ろとの天狗である、吹聴も豪かつたが美味ことも美味、此の分では一本五圓の辨當などは、喰了はない中に兩の頬が落ちて、ダツソリ殺がれて顔の形が悪くなるかも知れぬ、あゝ美味の舌鼓に三人は満腹すると、

腹の皮が脹る眼の皮が弛み、一夜碌々唾らなかつた疲れで睡氣を帯びて来る。鰯呂野は丸子に先へ歸られると面倒だからと、二人を伴なふて歸れば物品差入口に、昨夜と今朝の飯と副食物二人前づゝある、

『さア是れから此の飯の始末だよ……この儘では露顯する……』

『左様だ、頭隠して尻かくさずでございますぞ、あはゝゝゝ。』

三七

熊谷が強盜をする猿芝居

三人寄れば文珠の智恵だ、此の飯の始末を何うするぞ。

『捨るのも惜いね……惜いより勿體ないで……』と鰯呂野は云つた。權右衛門は

『勿體ないだ……百姓が米イ作るのを思へば捨られましねえぞ……副食

物だつて、左様でございますぞ。』

『併し諸君に喰へるかい……今、美味物を喰た腹だよ、仕方がないさ……古新聞にでもあけて置いて後で始末をするより策の施しやうはなからう。』と笠田が云つたので、飯も副食物も新聞包みにされて了ひ、哀れ罪なくして都真田で八重十文字に縛られた。

十一時に丸子は歸る、笠田はぬからぬ頓智に、昨夜は鵜呂野君のところで、お留守番のお相伴、米の高い時節に二食の喰稼ぎと笑はせたは中々の狸である。

さて今日の行先きはとなると、丁度お開帳中の高輪泉岳寺、是非一度は行かねばならぬ處と、三人の男はお諷談を一人の丸子に使ひて、御機嫌を取結ぶもテレ隠しである。

『皆さんも入らッしやるの……』

『今その相談中……丸さんが歸つたら一所にと待てゐたのさ。』とは鵜呂野も細君の籠絡は天晴お手に入つたものである。

丸子もツイ出懸る氣になつた。

さア出ると成て笠田はイの一番に飛び出す、次が權右衛門、次が鵜呂野高男、次が丸子であつたが、何事でも緻密に氣の注ぐのは女の天性で、片隅に寄せてあつた新聞包みを認めて、

『是れは何方の……大層重いものね。』と持て來た。鵜呂野はギョツトした、入口に待てゐた笠田はそうなる透さない、

『お、僕のだ……既のことと忘れる處……有難ふ……』とバツを合せて受取つたが、さア厄介である。僕の物と受取つた上は、此の重い飯と副

食物のしゃになつた打捨り物を抱へて歩かねばならぬ、まさか道で捨たら彼の神経質で、柄にもないヒステリーを起すに違ひはない、鵜呂野が可哀さうだと友人に同情し、新聞包を仕方なく抱へ込んで出で、電車の中で忘れた積りで置いてけぼりが好い名案と喜び、例の公園前から品川行きに乗りこみ、側に置かうとすると新聞が破れ、煮物の汁が染み出して来たにますく閉口したが、此の中へ置去りものと腰掛の下へ入れた。

「泉岳寺前……泉岳寺前……お降の方はごさいませんか、お聲がないと止ずに参ります。」と車掌の聲におどろき、

「降りますよ……降りますよ……」と四人は下車せんとする、笠田は憫た風で飛出さうとすると、丸子がまたも新聞包を手にしてヨタ／＼後から下りながら、

「笠田さんまた忘れもの……能く忘れる人ねえ。」と手渡しするに、之れはと痛み入つて頭を搔きつゝ、折角の名案も畫餅となつてまた残飯の持役。

停留場の右側に青い自然石に萬松山四十七義士舊蹟と血のやうな眞赤な朱を入れた案内が建てある。泉岳寺の門まで舊は狭い道であつたが、今は広い道路で、兩側の店は玩具も義士である、陶器も徳利盃に大石の定紋附けて賣る、暖簾も討入の時の白黒の段々染めにして、雪の夜といふ汁粉店さへある、繪葉書などは勿論のことである。

門内の左が四十七士の墓所で、常夜燈の處に天野屋利兵衛の石碑がある、墓所に参拜して遺物など観覽したが、何れも下足料や入場料を取られた。

開帳といふので寺内に種々の興行物が掛つてゐる。其の中に猿と犬との寄合芝居がある、看板が如何にも面白さうだから、權右衛門が頻りに熱心である。丸子も同意賛成だから鶴呂野は仕方がない、斯うなると多數決で笠田もお交際で大札四枚買ふと、十錢銀貨で二錢の剩錢が来た。人間の芝居と違つて幕が明と休み、幕が下ると狂言が始るので、二錢の特権あるものゝ外猿や犬のお芝居は見られないのだ。四人が入ると幕が下りる、鏡を着た小猿が左の花道からチヨコ〜と出る、右の花道からも倍もあらうといふ大猿が崩黄絨の大鎧花やかに出て来た。大猿小猿ども首に綱がつき猿曳が黒坊代りに兩手へ綱の端と拍子木を持て出ると、淨瑠璃の太夫は見臺に向ひ、三味線弾はその隣に窮屈さうに坐つて『かゝる處へ後より熊谷次郎直實……駒を早めて遂駈け來り……』と語る

大猿の熊谷は扇を閃かし、是より敦盛との組討となつたが、前の方に見てゐた小供が菓子を喰てゐるを、熊谷どの激しき戰場を切捲つて腹が減たやら、突然飛かゝつて小供の菓子奪ひ取つて切取強盜武士の慣ひといふ見得で、ムシヤリ〜の暢氣さに、黒坊の後見役は周章拍子木ガタリと脅す、出方の者は小供に詫びする大騒ぎで、お芝居は滅茶〜になつたが見物は一同大笑ひ。

再度の演り直しは流石に能くも仕込だり、能くも覺えたり是れから見ると人間の芝居は拙いものだと、村芝居に比べる權右衛門の評判は都會劇評家先生を凹ました。

泉岳寺を出たは最う四時、日はまだ高いが丸子も昨夜は夜更してゐる、男連は猶更に昨夜氣で身體が疲れてゐるので、犬川と極つてまた電車の

御厄介。この時までも笠田は例の新聞包を荷厄介にしてゐたが捨所なく、
 到頭歸りまで持扱つて須田町で電車を乗替た後、稍とのことで置き土産、
 『あゝ馬鹿を見た、昨夜といひ今日といひ一晚驕らした位ぢやア引合な
 い……フ、ム……』

三八 自働車に乗て四邊を睨め廻し

上野向島と並べ稱せらるゝ東京郊外の名所、飛鳥山の花は最う後れ
 たが、花の下で遊び狂ふには廣くツて障害物がなく至極好い、年寄側の
 人の話には富豪やなんかに、名所の山も幾干か狭められたけれど、猶ほ
 踊つたり狂つたり、鬼ごっこをしたり、芝生で茶番でも演つたりして、
 花見客にヤンヤと言せ、我れも人も共に樂むには此處が屈竟で、三味線

を彈てトチ狂つても風俗を紊さない限りは、花も咎めず人も咎めない唯
 一の場所である。その飛鳥山にある富豪の別荘を借りて、笠田覺藏の伯
 父さんで實業界に名を知られ、銀行の頭取金山唸といふ方が誕生祝に園
 遊會を開き貴顯紳士や淑女令嬢を招待した。

鷗呂野夫婦も權右衛門も笠田の斡旋で、此の園遊會へ招かれる事にな
 った、何しろ實業界に錚々たる名ある紳士の園遊會である、都下の名士と
 一堂に會する名譽の招待である、殊に笠田も當日幹事に擧げられ接待掛
 りを勤めて居るから、失錯はさせぬこんな宴會の席に列するは好土産話
 と勧められ、何となく氣臆れがするやうだが意を決して列席の通知を出
 した。

鷗呂野はフロックがない、帽子がないので羽織袴を借りる。丸子は白

襟紋附がないので是れも朋友から借り、権右衛門は幸ひ六三郎のがあるので、之れを借りて着ると馬士にも衣裳、平常の権右衛門と違つて立派である、斯うなると晴の宴會へ列席だ、來會者は馬車や自動車で繰込む人が多からう、俵でガラ／＼と乗込んだとて幅が利かぬ、一度は自動車に乗つてプ／＼と砂煙を揚げて走り、往來の人が吃驚して除けるのを、車上から悠々と見てゐるは何様に愉快であらうと、ハイかつた企望を抱いて居た鵜呂野高男は、此様時こそ自動車を利用して一番田舎者／＼と輕侮する東京紳士の膽ツ玉を挫ぐも愉快だと、少し都會の風が染みると忽ち虚榮に駈られ、大膽にも貸自動車店へ電話で掛合て見ると、一時間三圓五十錢と云つた、其の一時間といふ事は聞き漏し、三圓五十錢とは安いものだど大喜び、東俱樂部まで迎ひに來させて三人は乘

り込むとき、鵜呂野は俵に乗るにも電車に乗るにも、笠田が何時も乗る時に賃錢を拂ふのを見てゐる、總てが先に拂ふのが東京の通人と心得、三圓五十錢を自動車の把手に拂ひ、今日は大紳士だ、この體には笠田も驚くだらうと恐悦がる間に、呆氣ない程早く飛鳥山の會場へ着いた。

最う大分馬車も來てゐる、自動車も二ツ三ツある、俵は數百輛供待をしてゐる。

「権右衛門さん、盛んなものですね、流石東京紳士の園遊會だ……ねえ丸さん、今日は私等も大いに紳士淑女の體面を保んけりやア成ないよ。」

「左様よ……妾だつて令夫人の招待狀を下さつたのだもの……」

「いや何うも豪い俵ぢや、自動車で來てる人もございますぞ、はア、彼の自動車は私イ等のちツかつて來たのより美しいぢやが、彼れも損料

の借物かな……』

『政府の大臣でさへ自動車は借て乗つてゐるのだと、此の間の新聞で見
たからね、民間の者の乗り歩くのは何れも借物だらう、我黨の士だよ、
はゝゝゝ。』と何時になく鷓野は得々として先立ち、受付けに名刺と
招待状を示して入つた何方へ往つて好のかとまごくして居る。之れを
遙に認めた例の笠田は胸に造花の緋櫻をつけ、フロック扮装で駆けて來
た。

『やア、能く來てくれた……君方の處へ櫻花の徽章は配付しなかつたか
い……』

『來たよ、僕は玩弄だと思つて置いて來たがね、あれが何か役に立のか
い……』

『あれを胸に付てる人が、當日のお客様だ……櫻花の徽章がないと模擬
店へも、食堂へも入ることが出來ないのだよ。』

『はア、私イ等そんな事は知りましねえで……ちよツくら持て参りませ
うかい……』と權右衛門は例の無邪氣をやる。丸子もあらと云つて困つ
てゐる。

『お三人とも無いのだね、仕方がない何うか都合をしやう、此處に待て
ゐてくれたまへ。』と笠田は駆けて往つたが、フロックの下から窃と三個
の白い櫻花を出し、三人の胸につけ

『君、落さんやうにして呉れ……今に合圖の鈴が鳴ると、模擬店といつ
てね、此の庭の中に團子や汁粉、鮓、天麩羅、おでん、生麥酒などいろく
の店が開かる、其の店は何處へ入つて喰るだけ喰てもいゝのだよ……夫

れに餘興には丸一の太神樂、假裝行列などがあつて、最後にあの天幕の中で立食の饗應があるのだから、寛々遊んで居てくれ、僕も始終斯うして歩いてるから、若し用があつたら、胸に赤い櫻花をつけゐる者に頼めば、僕を呼んでくれるさ……』

『左様か有り難ふ〜』

『お蔭さまで、はア、……』と權右衛門の云ふを笠田はデロ〜見て、

『權右衛門君でしたか、何れの大紳士だかと思つて……は、は、〜』

『は、は、は、〜私イも今日は紳士でござえますぞ、左様に安うして貰ひますまいぞ。』と大いに笑ふた。

ガラン〜ガラン〜と鈴の音は其處此處に響く、白い櫻花の徽章をつけた紳士、花の如き令嬢や意氣や高尚の夫人方が咲亂れ風なくて散る

花の下、揚貴妃、牡丹、緋櫻などの八重が咲き誇る此方に逍遙する美しさ、何方を見ても庭も人も美しいに、三人も浮れてうろ〜と徘徊してゐる。拍子木がカチ〜カチ〜カチ〜と響くと、太神樂〜とドヤ〜人が駆ける、

『何か始まるのだ、行つて見やう……』と鷓野は手を引いて駆け出さうとしても、丸子夫人の足が歩き習ひの小兒のやうでヨタ〜するから駆られない、權右衛門はまた窮屈袋をつけてゐるので、思ふやうに歩かれません頭ばかりを乗出して行く。

三九

摸擬店は赤前垂の羅生門

丸一の曲藝は始つてゐる。撥の曲取り毬の籠抜けなど鮮かなのに感服

して、一しきり面白く笑ひ興じた。

曲藝がすむと集る人の散ると共に、又園内を歩くと此處や彼處に赤前垂に赤手襷をかけた美人が、摸擬店を受持て顔馴染の男と見ると、三人も四人も飛出して擔ぎ込み、キヤツ〜と動揺めき騒ぐ。笠田は三人が馴れぬことゝ困つて居るだらうと、彷徨見歩くうち果して茫然佇立んでゐる。

『何か喰たまへ……奥様は何が……それぢやア粟餅の曲搗を御案内しやう。』と築山の後背の方へ回ると、一軒の摸擬店がある、生麥酒の店だ、此處の受持は赤坂藝妓の一群である。樂々亭へ招だ婆もある、ちん六もちよ〜介もすき彌も皆赤前垂赤手襷で眼張るから堪らない、馴染が來たらと腕に捻を掛けて待かねて居るところである。

『お寄んなさいよ、……』で客を引付けて居たが、鵜呂野の丈の高いのを一番先に見付けたが老眼とて油断のならぬ老妓だ。横にごろ〜しては居るが、丈は低いから丸子が巾着とは知らぬ、また何處かの枇杷樽夫人が轉がつてると思つても、それが鵜呂野の令夫人とは暖にも覺らぬから、

『ちよ〜ちゃん、來たよ〜、此間の旦那が……早くお捕へよ……』

『あら……』と云つて見るうち、ちん六も權右衛門、笠田を見付ける、『すうちやんのも來たよ……』と騒いで一團が駆け出した。

『旦那、さア入らツしやい、此處には關門があるんですよ、素通りはさせませんの……入らツしやい……』とちよ〜介が乾燥き切つて鵜呂野の前に立塞がる、權右衛門は最うすき彌に手を引張られて、

『あれ、何をさッしやるぞ……之れは、はア無體な……』と拏ぎ離さう
 としても離さばこそ、

『先ア待ッしやい……待ッしやい……』

『何です、皆さん……満更知らない中ぢやなしさ、逃げるなんてえのは卑怯未練ですわ、夫れでも男子ですかい、翠丸がありますかホ、、、』と老妓はすはぬけた調子で引き込まうとする。

意外なところで意外な敵の伏兵に要撃されて、鶯呂野は九子の手前があり、振拏ぎつて逃げやうとするが、對手はお茶瓶付とは氣も注かないから、

『何です、厭ですわ、……姐さん一寸と来て頂戴よー、逃げられさうだわ……』とちよ／＼介は夢中になつて争ふ。鶯呂野はますます閉口して

大回みであるを、九子は驚いて横目で凄じ睨みを浴せ、顛顛のあたりに見る／＼蚯蚓のやうな青筋が太く逞しく凝々出した。心配で堪らぬから鶯呂野は絶ず九子の舉動に注意すると、最う怒りは焼點に達しさうで、何時飛び掛るか知れない模様がある。左様なつては事だと一世の勇を振つてちよ／＼介を突退け、九子にも構はず一目散に逃出しホツとする。

権右衛門は店頭店内に擔ぎ込まれて、麥酒を吞まされる。

『是れは、はア、幾干出すのでごせいますかの……』

『ホ、、、又彼様御串戯を……』

『いや、私イ知らんで聞きますぢや、幾干出しますするかな……』

『厭よ、今日のはお錢、いららないのよ。』

『はア、錢イ出ましねえかな……それでは最う一杯ついで呉れさッしや

いませ……』とは正直な愛嬌ものである。

笠田は當日の幹事赤い花の徽章があるので強られない。鵜呂野は枇杷樽夫人同伴と知れては、氣の毒がるもあつて哄然わらひ、捕虜となつた権右衛門も放還された。

笠田は一行に粟餅の曲搗を見せ、鮎屋の摸擬店に案内して満腹させた。

爾う斯うするうちに鈴はまたけた、ましい響きを傳へ、食堂の開始を報知る。來會者はぞろぞろ大天幕の中へ吸ひ込まれる、此處は立食の饗應で、各自に皿盛の西洋料理が配付してあつた。食堂についた三人も覺束ない手つきで小刀や叉手を執つてゐると、當日の主人が摺袂來賓總代の答詞があつて、拍手喝采が一時に天幕も動揺くまでに起つた。

三人はいろ／＼の物を詰込んでゐるので、腹が脹れ最う喰べられない、

折角の御馳走をこの儘置いて往くも惜い氣がする、権右衛門は低聲で、『惜いことをしましたぞ、此様に馳走があるなら、私イ重箱のウ借りて來申したになア……』と云つた。丸子はクス／＼笑つて居たが、『真逆にねえ……』と同感に堪ないやうであつたが、急に思ひ出たやうに、

『良人……自動車の中で讀でゐらツした新聞は……』

『あるよ、何うするの……』

『好からお出さないよ。』と笑ひながら云つた。鵜呂野は袂から新聞を出して窃と丸子に渡すと、半頁を権右衛門に分與し、泥坊猫が肴を引くやうに周圍の客の目を偷んでは、夫婦の分のお料理を新聞紙に包む、権右衛門も感心した風であつたが、其れは又無遠慮である、食卓の上へ新

聞を廣げ、皿から料理をあけた、そして立て行つた隣席の客の分までも食堂も大分あいて、徐々歸途に就く客も多くある。三人もいざと會場を出て、乗つて来た自動車はと探しただけと居ない、倉忽屋が乗つて往つたのか、乗る奴も乗る奴だが乗せる奴も乗せる奴だと、鵜呂野はブツと怒つたが對手がない喧嘩である。

電車で上野へ着き俱樂部へ歸ると、まだ室にも入らないうち電話で自働車屋へ詰問すると、何のことだ、一時間の代金より頂ませんからお送り込ばかりですとの答へに、

『え、一時間が三圓五十錢、……夫れぢやア十圓ばかり得をした……フ、ム……』と獨りで笑みを含んだ。

四〇 寄席聽て獨合點に感じ入る

九段の招魂社から青山墓地の方を見歩いて夕方に歸つた夫婦、丸子夫人は足のツンツラ短かいのを投げ出して休んでゐると、例の笠田が遣つて来た。

『やア、忙しかつたので二三日御不沙汰した……最う東京は大概見たらう。』

『お蔭様で、見物させて貰ひましたよ、それに此間のやうな園遊會にまで御招待を受け、眞個に満足ですわ。』と丸子も今日は至つて機嫌が好い。『君にも豪い暇潰しやら散財を掛てお氣の毒だつたね……其の代り今年の夏は避暑ながら来てくれたまへ……田舎では何も見るものも、遊ぶ處

もないが、紅塵萬丈の都會より空気の好だけが御馳走さ。」

『あゝ、僕も久しく歸省せんが、親が居るぢや無し親戚も遠縁ばかりだから、ツヒ往く氣に成らなかつたよ、君と斯うして舊交を暖め、奥様も御懇意に成つたからは非行くよ。』

『何うかね、奥様もお同伴なさつてねえ。』と丸子も愛嬌を振替く、

『はア、有難う……君……まだ寄席へは往かなかつたらう、今夜は何う

……』

『さうだ、往かうか丸さん何うだね……権右衛門も誘つて……』

『はい、好でせう、觀たり聞たりするものは成るだけ欲張てかないと、又出て来るのは騒ぎですから、ホ、ホ、』と草臥序に何處へでも辭せぬの勇氣は豪いものである。

権右衛門を誘ひ、丸子は女連がないとて六三の内儀さんを誘ひ出し、同勢四人神田の立花亭へ入つた。色物である、真打が小さんだから入りも相應にあつて、最う始まつてお河童さんの小供が義太夫を語つてゐる。追々客は込で来た。

『お氣の毒様ですが少々お膝送りを……』と寄席の若者や女中がいつて、客を詰させ入れるだけ入れやうとする。権右衛門の前に一人二人割込めさうだから、

『君、前へ進みたまへ、其處へ客を入れられると窮屈になるからね。』

『はア、前へ出ますがな、私イ餘り前へ出ると膝ア痛うてならんぢや……』

『胡坐をかきたまへ……此様とこゝろで遠慮して居なくも好よ……僕なん

か最う遣つてるんだ……』と笠田は自分の膝を叩いて見せる、

『はア遣らふと思ひまするぢやが、邪魔に成つて……』と隣席の人を窺と指さす、鵜呂野も二三寸詰て少しの空隙が出来るとき、ドッコイと胡坐をかき、

『権右衛門さん斯うすれば好のだ……』

『ホ、ホ、良人はづるいのね……』と九子は笑ふたが、権右衛門も同じやうに遣つて大胡坐をかいて、フ、ムと鼻の先で笑ふ。

高座へは落語家がでた。ノベツ幕なしに早口で彼の『たらちめ』の話をしたが、聞き馴れない鵜呂野や権右衛門には、何を云つて居るのか些とも解らない、また笑止くもない。笠田や六三の内儀さんは面白さうに笑つてゐるので、其の顔ばかりを眺めて不思議さうに思つてゐた。

稍と濟むかと思ふと又出たのも落語家である、高砂やの話であつたが面白くないので、権右衛門は例の無頓着でア、ーと大まな欠伸を遣つた。

『シツ！シツ！』と制止するものがあるので、目をくりくりさせ、

『落語家ちうもんは、解りましたねえ事を言るものぢや……豆腐賣と謠曲のう一所にして……』と天真爛漫的に話かけた、笠田は黙つて居ると、手付で制したが、先生一向お構ひが無い、鵜呂野に向つて、

『貴下さん、何時歸らッしやるな……私イ最う近いうちにぢや……田植時にもなるで……』と云ふと、またシツ／＼と制止されても平氣で話を

する、

『黙れ！田舎者だまらねえか……』

『お百黙れ！』と見物席から鎗が出る、後の方からは

『お静に願ひます……』と云ひ樂屋からはまた、

『東西く、トウザーイ。』

是れで權右衛門も黙る、活人畫や獨樂などになると、あはくくと笑つて、歓迎してゐた。流石に真打の話は滑稽で面白く、殊に田舎者の蕎麥を喰つて醬汁を上から打掛けるところになると、

『ひやア、是れは……おツ魂消しましたぞ、あの時イ此の落語家が見て居りましねえ筈だに……あれまア、跡から來さつした衆の喰つしやる真似まで仕をるぢや、はア、呆れたもんでございませうぞ。』

『おいく。』と一方からは笠田が袖を引く、また一方からは六三の内儀さんが

『阿父さん……阿父さん……』と低聲で袖を引かれ、

『何でございます かな……』と權右衛門はまだ氣が注かなかつた。寄席がハ子て歸つても、此の話には深い感動を與へ、六三郎やおのこが何と言聞しても自分の失策を演せられたやうな氣がして、何うしても得心が行がなかつた。

午前七時廿分の日光行列車は、上野驛を離れる處である。鵜呂野夫婦と權右衛門および大工の六三さんが乗込で居る。プラットホームには笠田夫婦、馬淵牛尾の兩夫人と外に二三の丸鬚連、六三の女房など十餘人がごたくと立てゐる。

ピークの會圖に氣車はガツタンくと動き出した。

『御機嫌よう……御機嫌よう……』

『左様なら長らく有難うございました……』

『はア、何うも大いお世話様でございました、はア、はア……』

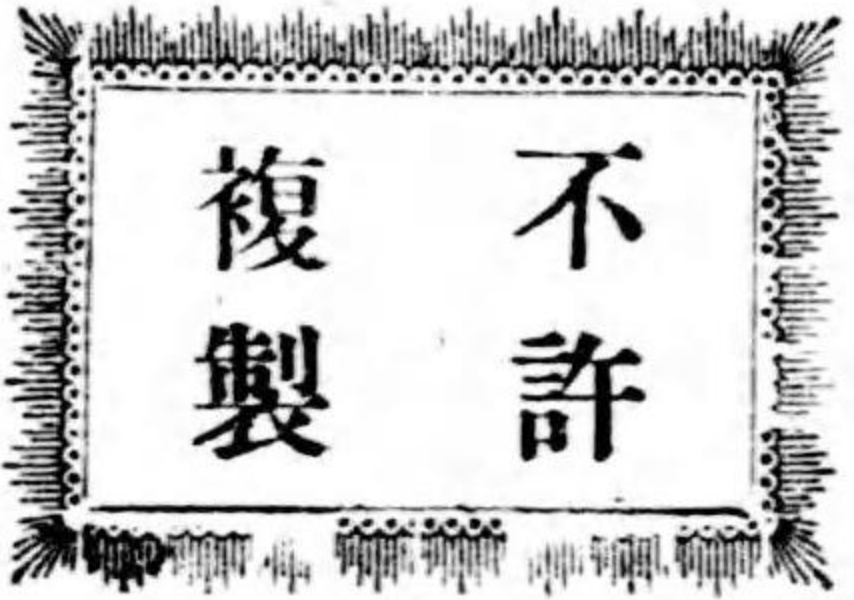
互の聲は次第に双方に薄れて、丸子の窓から振る手帛も見えなくなつて了つた。

東京見物 終

大正參年四月廿一日印刷
大正參年四月廿四日發行

(東京見物奥附)

正價 金四拾五錢



著者 烏 勘左衛門

東京市神田區北乗物町四番地

發行者 福田 滋次郎

東京市淺草區小島町七十三番地

印刷者 田中 龜市

東京市淺草區小島町七十三番地

印刷所 南豫堂印刷所

電話下谷五一三三番

發行所

東京市神田區北乗物町四番地
振替口座東京壹貳〇八六番

日本書院

日本書院好評書目

悲歌 慷慨 日本熱血史	日本斷腸史	非常識論	沒常識論	痴遊義士傳 <small>の討入 卷</small>	家事應用理化學	現代結婚寶典	出雲大神
正價 五十錢 郵稅 六錢	正價 五十錢 郵稅 六錢	正價 六十五錢 郵稅 八錢	正價 六十五錢 郵稅 八錢	正價 六十錢 郵稅 八錢	正價 壹圓拾錢 郵稅 十錢	正價 壹圓五拾錢 小包 十二錢	正價 參圓 小包 十六錢
東京見物	滑稽日本未來史	英雄物語	新滑稽問答	當世戀物語	百笑	新作落語	世界珍談集
正價 四十五錢 郵稅 六錢	正價 四十五錢 郵稅 六錢	正價 三十五錢 郵稅 六錢	正價 二十錢 郵稅 四錢	正價 五十錢 郵稅 六錢	正價 二十錢 郵稅 四錢	正價 三十五錢 郵稅 六錢	正價 二十五錢 郵稅 四錢

終